

オロカとオロソカ（その五）

我 妻 多 賀 子

形容動詞のオロカとオロソカについて、この小誌に、これまで過去四回にわたって、左のように五章に分け、考察を加えてきた。△注▽

- 一 はじめに
- 二 オロカの通時的考察（上代〜中古）
- 三 オロカの通時的考察（中世以降）
- 四 オロソカの通時的考察（上代〜近世）
- 五 オロカとオロソカの比較考察（その一）

そこで、今号では、前回の比較考察に続ける形で、新たに章を設け、より詳しく、この二つの形容動詞の使い分けについて、ながめてみることにしたい。

六 オロカとオロソカの比較考察（その二）

初めに、前の号に書き記した比較考察の概略を、述べることにする。

オロカとオロソカは、共に上代から現代まで用い続けられている語であるが、その使用頻度数は、断然オロカの方が、オロソカを上回っている。

例えば『古今和歌集』を見ると、オロソカ一に対してオロカが二、以下、『宇津保物語』では、六対三十一、『源氏物語』九対百三十一、『平家物語』二対二十八、『徒然草』三対三十一、『天草本平家物語』六対十二、『西鶴作品』三対二十六と、いずれの作品でも、オロカ

は、オロソカの約二〜十倍以上の量で使われている。

さらに、オロカはほとんどの文学作品に出て来るが、オロソカの場合、その用例が皆無というものが、私が目を通してみただけでも、『万葉集』『大和物語』『落窪物語』『蜻蛉日記』『枕草子』『和泉式部日記』『狭衣物語』『夜の寢覚』『浜松中納言物語』『堤中納言物語』『今鏡』『今昔物語集』『水鏡』『とりかへばや物語』『古本説話集』『保元物語』『曾我物語』『義経記』『御伽草子』『さよとべかどる』『雨月物語』『浮世床』など、かなり多い。

そして、右の作品群を見ると、時代的には、上代から近世まで、また、ジャンルの点でも、多方面にわたってオロソカの用いられていないことが判明する。

そこで、これほど使用量に大差のあるオロカとオロソカを比較することは、それ自体いささかためらわれるが、ともかく同一作品中で、この両語が使用されている場合、その使い分けはどのようになっているのかに注目して、以下見ていくことにしたい。

その前に、まず種々の用例を吟味した結果、分類し得たオロカ、およびオロソカの意味を掲げてみることにしよう。〔注2〕

オロカ

- I Ⅰ いい加減である、疎略である
- I Ⅱ そっけない、冷淡な、よそよそしい
- II 「言へバオロカナリ」式の慣用句
- III ① 知恵が足りない、愚鈍である
- ② つまらない、くだらない
- ③ 未熟である、下手である
- ④ 劣る、足りない

オロソカ

- I 透き間が多い、まばらな
- II 簡素な、粗末な、みすぼらしい
- III そっけない、冷淡な、よそよそしい
- IV いい加減な、疎略な
- V 劣る、よくない、すぐれない

右のように、オロカを七つ、オロソカを五つに分類してみた。このうち、オロカのⅡおよびⅢ、そしてオロソカのⅠⅡⅤは、それぞれ、オロカ・オロソカ独自の用法であり、比較の対象にはなり得ない。また、オロカのⅢ④とオロソカのⅤは意味が似ているが、オロカのⅢ④の方は、近世になって、初めて出て来た類型化した特殊な用法なので、これまた、対象外となる。

結局、「いい加減である、疎略である」の意味を有するオロカのIとオロソカのIV、そして、「そっけない、冷淡な、よそよそしい」の義を表すオロカのI'とオロソカのIIIが、共に類似していて、比較の対象となり得るものと言える。

さて、今回私が調査した六十有余の文献の中で、右の二つの意味を持つオロカとオロソカが、共に使われているものという、わずかに十六作品だけになる。

そこで、まず、その作品名を、それぞれの用例数と共に左に表示してみることにした。表は、オロカ・オロソカとも、上段の数字が「いい加減な、疎略である」の意味を表すもの、下段の方は、「そっけない、冷淡な、よそよそしい」の意味に取れるものを示している。

竹 取 物語	古 今 和 歌 集	作 品 名	
		オロカ	オロソカ
二	一		
三	〇		
〇	一		
一	〇		

宇津保物語	源氏物語	紫式部日記	大鏡	発心集	平家物語	十訓抄	沙石集	徒然草	増鏡
一三	九〇	一	五	一一	五	三	一	三	六
一二	三七	〇	二	一	四	一	〇	〇	一
一	三	一	一	〇	一	一	八	一	一
五	一	〇	〇	一	〇	〇	〇	〇	〇

近松作品	西鶴作品	天草本平家	謡曲
一	二	一	二
○	○	○	○
二	一	五	二
○	二	○	○

ところで、右の十六作品の用例を詳しく見ていくに際し、当然問題にすべきなのが、異文があるかどうかという点になる。そこで、一つ一つの用例を取り挙げその校異を調べてみたところ、『古今和歌集』『大鏡』『平家物語』『沙石集』の四作品については、オロカもしくはオロソカの用例が、一つしか出て来ない上に、明らかに異文が見られた。△注3▽

したがって、これらの四作品は、明確なオロカ・オロソカの用例とは言い難く、考察の対象からは外さざるを得ない。そこで、残った十一作品のうち、同義のものがオロカにもオロソカにも見られた場合に注目し、以下、A「いい加減である、疎略な」、B「そっけない、冷淡

な、よそよそしい」の二グループに分けて、細かく見て行くことにしたい。

A 「いい加減な、疎略である」

表でわかるように、『竹取物語』と『発心集』には、この意のオロソカの例がないので、おのずから、対象外となる。

よって、ここでは、十作品について調べて行くことになるが、以下、なぜ、同一作品の中で、同じ「いい加減な、疎略である」の義を表すのに、一方はオロカにし、もう一方はオロソカにしたのか、そこに何らかの使い分けがあったのかどうかを、用例の少ない方を中心にして時代順、作品別にながめることにする。

◆宇津保物語

この作品では、「いい加減な、疎略である」の意味を表すオロソカは一例だけ出て来る。

○「奪(ば)ひえつ。これやおのおし給みむすめ。なめきつみぞはからるゝ。をろそかなるつみぞれうぜらるゝ」
(藤原の君)

通釈すると、こは、「奪い取ったぞ。これこそあの左大將が大事にしている姫である。これ者ども、無礼の罪は罰せられるぞ。疎略の罪は苛酷に処せられるぞ。これ博打(ばくち)ども」となる。

つまりこの部分は、あて宮掠奪の計画を実行した上野宮方の博打や京童部が一の車を奪った時に発した言葉であり、この文で、オロソカは連体形として、その前の形容詞ナメシ同様、ツミ(罪)という体言にかかっている。一方、この意味に取れるオロカの方は、十三例出て来るが、そのほとんどが、下に打消・疑問・反語・仮定の意味を伴っている。右のオロソカのように、連体形として用いられているものは、左に示すわずか一例だけである。

○「をろかなる御まもりか」 (楼上・上)

こは、「私(兼雅)は、あなた(兼雅北方)にとつて、疎かな護衛兵に過ぎないだろうか」と訳すことが出来る。よって、『宇津保物語』では、同じ「いい加減な疎略である」の意を有していながら、オロソカの方は、連体形として「罪」という抽象名詞にかかり、オロカは対人関係の場合に用いられているとでもいうことが言え

ようか。

◆源氏物語

三例しかないオロソカのうち、二例は異文が見られる。よって、オロソカの確かな例とは言い難く割愛せざるを得ない。残った一例は、左のようなものである。

○「桐壺帝」「内蔵寮(くらづかさ)・穀倉院(こくさうゐん)など、公事(おほやげごと)に仕(つか)うまつれる、おろそかなる事もぞ」と、とりわけ仰せ言ありて、「儀式係八」清らを尽くして仕(つか)うまつれり。(桐壺)

右の会話の部分は「内蔵寮や穀倉院などがお役所仕事として奉仕したのでは疎略なことにもなりかねない」と解釈出来、オロソカは連体形として「事」にかかっている。

一方、「いい加減な、疎略である」の意味を有するオロカは『源氏物語』に九十例出て来るが、そのほとんどが、先の『宇津保物語』の時と同じく、下に打消を伴ったり、反語表現と共に用いられたり、仮定の意味に続くものばかりである。オロカが先述したオロソカのように

連体形として使われた例はわずかに左の三つだけである。

○「宮、きこしめしつけてば、さぶらふ人々の疎なるにぞ、さいなまれむ」
(若紫)

○すこしも、疎なるをば、「めざまし」と、思ひ聞え給へるを
(紅葉賀)

○「もとよりおろかなる、心の怠りにこそ」

(藤裏葉)

右を順に解釈すると、「もし父宮がこの事情をきつとお聞きつけないならは、紫上のお側に付いている女房どもの不行届きとして、どうしても宮から叱られましよう」「源氏が少しでも疎略に扱うのをば、葵上は『心外だ』と不快に思い申しなさるけれど」「『夕霧ノ言葉デ』もともと私の不行届きの怠慢と思われますよ」となる。つまり、オロカは、女房達、源氏、夕霧のいい加減な仕事や扱いについて述べているので、人に対して用いられていることになる。したがって、『源氏物語』の場合も、『宇津保物語』と同じように、オロソカは抽象的で漠然としたことにかかり、オロカは人間関係を言う場合に用いられていると言えそうである。

●紫式部日記

「いい加減な、疎略な」の意味を有するオロカ、オロソカは、それぞれ一例ずつ出て来る。

○みかどつかさなどやうのものにやあらん、おろそかにさうぞきけさうしつゝ、

○かゝらぬ年だに御覽の日の童の心地どもはおろかならざるものを、ましていかならんなど心もとなくゆかしきに

オロソカの方は装束のつけ方や化粧の仕方について用い、オロカは、下に打消しの語が来てはいるが、童の気持ちについて言っているので、これ又、人に対して使っているかないかの違いがあると言えよう。

●十訓抄

これまでの三作品に対して、十三世紀の半ばに成ったこの説話集では、「いい加減な、疎略な」の意味に取れるオロカとオロオカが左のように一例ずつ見える。

○二ツ具セン事ナヲカタクハ、セメテ慈悲ハオロソカナリトモ質正ナラント思へ。
(上・六)

○中二毛氏ヲウケタル物、芸ヲロカニシテ氏ヲ継又類アリ。
(下・十)

右のオロソカの場合には、「慈悲」という抽象名詞に用いられていて、これまでと同様の使い方と言える。一方オロカの方は、「芸」について言っているので、中古で考察して来た用法とはだいぶ違う。先にオロソカの通時的考察をした際にも述べたが、「芸」に対しては、むしろ『風姿花伝』や『至花道』に例が出て来たように、オロカよりもオロソカを使う方が普通である。よって、右のオロカの用法は、オロソカの領域にまで、オロカが踏み込んで来たものとして注目すべきであろう。

◆徒然草

オロソカ一例、オロカ二例をまず掲げることにする。

- 老いぬる人は、精神おとろへ、淡くおろそかにして感じ動くところなし。(百七十二段)
- されど、おろかなる己(おのれ)が道よりは、なほ人に思ひ侮られぬべし。(八十段)
- 今の世にはこれをもちて世を治むる事、漸くおろかなるに似たり。(百二十二段)

右の文は順に「年取った人は精神が衰え、(外物に対しても)あつさりとして疎略になり、動揺することがない」「けれども(そういう専門外のところでは)おろそかにしている自分の専門の道よりもやっぱり人からは見くだされるに違いない」「現在ではこれ(芸道)で世を治めることがしたいにおろそかになって来たようである」と訳すことが出来る。この作品の場合も、オロソカは、今までと類似した用法で問題はないが、オロカは「専門の道」とか「芸の道」について使われているので、先の『十訓抄』同様、本来ならオロソカと言うべきところである。つまり、ここでも又、オロカがオロソカの用法範囲にまで入り込んで来たと言えそうである。

◆増鏡

オロソカ、オロカ各一例ずつ見える。

- 武家の目(ま)びきにてのみ、おほやけさまの事はよろづおろそかにぞしける。(十一八)
 - おろかなる契りだにかゝる筋のあはれは浅くやは侍る。(三三)
- オロソカの方は「武家の目つきばかりに気を使って、

朝廷の方のことは、万事にわたって疎略にした」と、又オロカの方は「ほんの一通りの夫婦仲であつてさえ、このように再会の望みのない生き別れの悲しさは、浅い事がありましようか。(いや、ありません)」と解釈できる。要するに、この作品でも、オロソカは「公事」という抽象名詞にかかつていて、特に問題はないが、オロカの方は人間に関するものとは言え、「契り」という具体的ではない言葉を形容している点で、これまで見て来た中古の用法と同じものとは言えない。

◆謡曲

謡曲と言つても、作品がそれぞれ違うので、比較するのに余りいい例とは言えないかもしれないが、取りあえず「いい加減な、疎略である」と解釈出来るものは、オロソカ二例、オロカが一例出て来たので、挙げてみたい。

○それと光同塵の御垂迹何れ以て疎かならねど、威光を四方に現し給ふは、これ八剣の神徳なり。

(源太夫)

○誰も皆こともおろそかなりとて設けなどしたりけれど……

(采女)

○恨めしやあれ程母のましますを思ひ隔てて山鳥のを

ろかに見させ給ふかと鏡の前に泣き居たり。

(松山鏡)

オロソカの方は最初の例が「御垂迹」つまり「神仏」に対して、また後の方は「待遇」について用いられているので、これまでのように抽象名詞に掛かっていると見える。一方、オロカの方は、「山鳥の」という語を「隔て」の縁で出し、「山鳥のをろ」と言い掛けて、「をろか」の序としている。△注4▽

通釈すると「ああ恨めしい。あれ程はつきりと御母様がお見えになるのに、薄情なお心で疎略に御覧になるのでございましょう」となる。ここでオロカは掛詞のようにして用いられていて、オロカの純粹な用法とは言い難い。むしろ、この謡曲では、オロソカの最初の例に注目したい。というのは、この例でオロソカは打消の語を伴っている。この種の用法がこれまでも決してなかったわけではないが、謡曲三百五十番中で、オロソカはたった二つしか使われていない。そのうちの一例が打消の語を伴っていると云うのは、確率としては非常に高い。そして、打消の語が下に来るのは、これまで考察して来た限り、どちらかと言うと、オロソカよりもオロカである。先に、中世に入るとオロカの用法が広がって、オロ

ソカの領域を侵し始めた旨述べたが、この場合は、反対にオロソカがオロカ独特の用法に接近して来ていることになる。つまり、オロカとオロソカに截然とした使い分けがそれほど見られなくなつて、用法が似て来たと言えそうであるが、この点については、以下の作品を見るとより一層はつきりとする。

◆天草本平家物語

まずオロカ一例、オロソカ二例を挙げてみよう。

○いづれもお嘆きのをろかなことわござらなんだれども…… (巻一)

○年来申し承つてのちはいささかもをろそかにわ存せなんだれども…… (巻三)

○今度討たれさせられた人々の北の方いづれかをろそかなことがござらうぞ。 (巻四)

右に挙げたオロカと、オロソカの初めの例は明らかに類似している。オロソカの二番目の例も、疑問の詞と併用されているが、これは、今まではむしろオロカの用法の一つとしてよく出て来たものである。前の謡曲のところでも一寸触れたが、ここに来て一層、オロカとオロソ

カの用法がよく似て来たと言えるのではないだろうか。

◆西鶴作品

参考にした西鶴のいくつかの作品のうち、「いい加減な、疎略である」の意味を表すオロカ・オロソカは、図らずも『男色大鑑』という同一作品に出て来たので、比較考察することに問題はないと思う。そして、左に記すオロカ二例、オロソカ一例を見れば明らかのように、これ又、いずれも下に打消の語を伴っていて、用法上これと言つた大きな差は見られない。

○これぞよしや難波の大きにたたせ給ふ愛染明王、役者おろかならず祈りて…… (巻四)

○万につけておろかなる事もなく見えわたりたる中にも…… (巻七)

○其身美道の意気をおろそかには思はぬ故ぞかし。 (巻六)

◆近松作品

近松のものは、すべてが同じ作品ではなかったが、オロソカ二例、オロカ一例いずれも前に西鶴のところでも述べたように、打消の語が下に来ている。

○一向（ひたすら）世のめぐみと明暮にをろそかならず。
（曾根崎心中）

○撞鐘（つきかね）をおろそかにつくべからず。

（博多小女郎波枕）

○家賃といへば、二ヶ月、三ヶ月先へはやれど滞らず、
町義、付合おろかもなき身（博多小女郎波枕）

要するに、この場合も、オロカ・オロソカ共に意味が同じで、しかも、用法的にも特別な使い分けが見られないということが言える。

以上で、「いい加減な、疎略である」の意味を有するオロカとオロソカが出て来た作品についての比較考察を終える。

B 「そつけない、冷淡な、よそよそしい」

右に記した意味で用いられているオロカ・オロソカがいずれも出て来て、そのうえ、異文も見られないのは、わずかに『竹取物語』『宇津保物語』『発心集』の三作品だけである。又、ここでも作品別にながめてみることにしたい。

◆竹取物語

オロソカ一例から挙げることにする。

○うめる子のやうにあれど、いと心はずかしげにおろそかなるやうにいひければ、心のまゝにもえ責めず。

右はかぐや姫に対して「こちらが気恥ずかしいほどにそつけない言うものだから」と翁が感じる場面である。

連体形オロソカは形状言「やう（様）」に掛かり、「言い方」について用いられている。これに対し、オロカは三例出て来るが、うち二例は下に打消を伴ったり、反語表現の中で用いられたりしている。連体形として使われているのは、左に記す一例だけである。

○おろかなる人は「ようなきありきはよくなかりけり」とてこずなりにけり。

オロカはここで「人」に掛かり、「かぐや姫に対してそつけない人」の意になる。したがって、『竹取物語』の場合、オロソカが抽象的な名詞について用いられているのに対し、オロカは具体的な「人」に掛かっている。つまり、この相違は、Aの「いい加減な、疎略である」

の中古作品のところで、考察してきたものと何ら変わりが
ない。

◆宇津保物語

この作品では「そっけない、冷淡な、よそよそしい」の義にとれるオロカが十二例、オロソカが五例出て来るが、それらをながめてみると、これまで述べて来たことと相違している点が見出される。まず、五例のオロソカのうち、四例までは、反語表現の中で用いられたり、下に打消の語を伴っていたりする。ところが、これはむしろ、他の中古作品では、オロカの方に見られた特徴である。オロソカが出て来る中古作品の、『竹取物語』一例、『源氏物語』九例、『紫式部日記』一例、『大鏡』一例、いずれも、下に打消の語を伴っていたりなどせず、平叙文で用いられている。したがって、『宇津保物語』のオロソカの用法は、どちらかというとおロカに近く、きわめて特徴的と言える。

又、オロカの方を見ると、もちろん下に打消の語を伴う例も出て来るが、左に記すように、連用形又は連体形で使われ、しかも具体的な人や物に掛かってはいないものがある。

- 「いぬ宮などををろかにおぼしたるにこそはべめれ。
(楼上・上)
- 「この人々どもはいもうとのためぞをろかなるや。
(国譲・上)

初めの方は「あなたは犬宮の事などをそっけなく思召しておいでだからです」、次の例は「この兄達は妹に冷淡だよ」と解釈出来る。いずれも「思ひ方」とか「扱ひの方法」など抽象的な事柄について言っているが、これは先述したように、明らかにオロソカの用法である。よって、この場合はオロカが、オロソカにとても接近した使い方で用いられていることになる。

以上、この作品では、オロカ・オロソカの間には、はっきりした使い分けが認められないが、それは、次に示す二群の事例を見ると、より一層はつきりする。

- 猶わがみこををろかには思はざりけりとおぼす。
(楼上・上)
 - 上はおろそかにはおもはぬなめり。(蔵開・中)
- 最初に掲げたこのグループでは、下に「思わない」という打消の語を伴っていないが、一方にはオロカ、もう

一方にはオロソカが用いられていて、その間に特別な使い分けの見られないことが判明する。さらにもう一つの群を見ると、

○この御中どもおろかなるにあらす。(国譲・下)

○いづくにもいかで見給ふればをろそかなる御中どもにも侍らざめり。(国譲・中)

これらも、二つ揃ってよく似た文章であるのに、オロカで表す場合と、オロソカを使っている場合とが見られる。以上の事から、『宇津保物語』における「そつけない、冷淡な、よそよそしい」の意味を示すオロカ・オロソカは、明確な使い分けが見出だされず、大いに注目すべきものと言えよう。

◆発心集

オロカ、オロソカそれぞれ一例を、まず掲げることにする。

○事にふれて妻も男もおろかならぬやうにて年月を送る程に……(第四ノ十二)

○兄のおのこ、まゝ母のために露もおろそかならす。

(第六ノ二)

中世の初めに成ったこの説話集では、「そつけない、冷淡な」の意味に取れるオロカ・オロソカが右のように一例ずつ見えているが、その用法はいずれも下に打消の語を伴い、人間関係について述べている点でよく似ている。よって、この例で見ると、オロカとオロソカの間には特別な差は認められない。

以上、オロカとオロソカが、共に「いい加減な、疎略である」の意を表す場合、および「そつけない、冷淡な、よそよそしい」の意味を有する場合のそれぞれについて考察を加え、なぜ同義でありながら、一方をオロカにし、もう一方をオロソカと用いたのか、その理由を探ってみた。その結果、古くは二語の間に区別が存していたとしても、すでに中古の作品において、これと言った明確な使い分けは見られなくなつて来ていることが分かった。このことは、先に前号でも記したが、異文が多く見られることから判断される。先には触れなかったが、『源氏物語』では、ただでさえ少ないオロソカ九例のうち、四例まで、オロカと書かれた異文が存在している。要するに、オロカ・オロソカの意味用法に、顕著な区別さえ

存していれば、これほどの異文を生じることにはなかつたものと思われる。

さらにこれを裏づけるかのように、もうひとつ注目すべき現象が見られる。すなわち、軍記物語の代表作である十三世紀初めに成った『平家物語』と、内容的にはほぼ同じことを記している一五九二年成立の『天草本平家物語』とを比較してみると、『平家物語』でオロカと書かれていた部分が、『天草本平家物語』の方では、オロソカとなつている例が出て来る。

○年来申承はつて後、をろかならぬ御事におもひまいらせ候へども・・・
(平家・巻七)

○年来申し承つてのちはいささかもをろそかにわ存せなんだれども・・・
(天草本・巻三)

○今度一の谷にて討たれさせたまひし人々の北の方の御おもひども、いづれかおろかにわたらせ給ひさぶらふべき。
(平家・巻九)

○今度討たれさせられた人々の北の方いづれかをろそかなことがござらうぞ。
(天草本・巻四)

右の例など、オロカがオロソカに取つて代わつている

ので、両語の用法が混同していたことの現れの一つといえるのではないだろうか。

ただ、オロカ・オロソカの意味用法が類似していると言つても、元々は別語であつたことは明らかである。九世紀末もしくは十世紀の初めに成つたと言われる現存最古の漢和辞書『新撰字鏡』には、オロカもオロソカも共に和訓の例が出てゐるが、それぞれ親字も意味も違つてゐる。すなわち、オロソカは

恢々 簡也 於呂曾加爾

と記されているが、「恢々」は『老子』に「天網恢恢疎にして漏らさず」とあるように、「こまかでないさま、広くて大きいさま」の義を表している。「簡」は「おおまか」ということであろう。

一方、オロカは

闇 不明之旨 劣弱也 暗也 於呂加奈利

と書かれていて、「明るくない、劣つていて弱い、暗い」などの意味を有していることになる。

さらに、院政期に出来た『類聚名義抄』（観智院本）を見ると、オロソカの場合は、オロのアクセントが平平、オロカでは上上となっていて、違う言葉であることがはっきりする。しかも、『名義抄』でオロソカの和訓がついている漢字を見ると、「疎・疏・稀・簡・鹿」など「う」とい、あらい」の意味を持つものばかりである。それに対して、オロカと訓まれた漢字は「魯・蚩・懂・少・癡・略・嬾・頑・凡」など、どれも「おろか、にぶい、てがるな、すこし」の義を表している。

よって、古くはオロカとオロソカの二語には、類似性が認められなかったことになる。

思うに、オロソカは原義的には、本来密なものが、透き間が多くてまばらになった状態をいうものである。その点から考えると、オロソカのオロは、アラ（粗）の母音交替形と言える。この「透き間が多くてまばらな」様子は、外見上きちんとしていないので、必然的に「粗末でみすぼらしい」ことになる。そして、これが人の言動について用いられると、「いい加減で疎略な」という義に転じ、さらに人間関係について言えば、その間が親密でないことから、「冷淡な、よそよそしい」の意味になる。そして、人の能力や運命など抽象的・精神的なものに使われると、「よくない、劣る」の意が生じる。

このように、意味がいろいろと派生して来たオロソカに対し、オロカは元々、暗くはつきりせず、十分でないところから、上代ですでに「いい加減である、疎略である」の義と、「知恵が足りない、愚鈍である」の二つの意味で使われている。

それが中古に入ると、「いい加減である」の方は盛んに用い続けられているが、「愚鈍である」の方は漢文訓読体では使われていても、和文学作品にはほとんど出て来なくなる。形式的には、大部分が下に打消の語を伴ったり、反語文中で使われたり、仮定の意味を示したりする「いい加減である、疎略である」の意のオロカは、時代が下るにつれてその用例数が減少して来る。

一方、「知恵が足りない、愚鈍である」の意味を有するオロカは、中世に入って和漢混淆文体の作品が多くなると用例数が増え、特に仏教関係の本では、頻繁に用いられるようになる。さらにこの意味から派生して、感嘆文の中で使用される「つまらない、くだらない」、そして、技術的未熟さを表す「未熟である、下手である」などの義も生じて来る。

近世になると、二つのものを並べて、その間に優劣のつかないことを表すオロカも現れる。そして、もう一つオロカの用法で注目すべきなのは、「・・・と言ふもオ

ロカなり」「・・・と申すもオロカなり」など慣用句の例である。これは中古作品で初めて見える「まだ言葉が十分でないさま」「表現しきれないさま」の義を表すもので、近世まで質量共に非常に多く使われている。

以上、オロカの用法は、オロソカ同様きわめて多岐にわたっているといえる。結局、オロカとオロソカが接近し出したのは、中古に入つてオロソカの方が具象物ばかりではなく、人の言動に対しても使われるようになり、「いい加減である、疎略である」の意味が生じ始めてからである。ここでオロソカは、元々その意味を有していたオロカに近づく。しかし、少なくともまだ中古作品では、オロカが具体的なものについて使われるのに対し、オロソカは抽象名詞にかかるといふ使い分けが見られる。ところが、中世に入ると、オロカ・オロソカともそれぞれの領域を侵し始め、特に人間関係をいう「冷淡な、そつけない、よそよそしい」の義を表す場合には、互いの用法がかなり似通つて来る。これは後世まで続き、例えば、『日葡辞書』では「人をロロカニする」と「人をヲロソカニする」が二つとも「その人を訪問もしないで冷たい扱いをする」というような、ほとんど同意で掲げられ、又、『倭訓栞』には「おろそか」の項に、「おろか」は意が同じである旨記されている。

したがって、江戸時代にはまだオロカ・オロソカの意味用法が混同していたものと思われる。それがいつの頃からか、この考察の一番初めに記したように、オロカは「愚」、オロソカは「疎」と使い分けられるようになり、現在に到っているのであろう。

以上、全五回にわたり、形容動詞のオロカとオロソカについて、先学のご高説を参考にしながら、長々と私見を述べて来た。△注5▽ もとより十分に意を尽くしたとは言い難いが、ひとまずこの辺で締めくくことにしたい。

△ 注1 ▽ 「学習院大学上代文学研究」第十五号

△ 第十九号参照

△ 注2 ▽ 考察に際して参考にした底本類については、第十七号と第十八号に掲げてあるの

で、Iとしてゐるのは、初めの考察の時に「そつけない、冷淡な、よそよそしい」の義を、Iに含めてしまつていたためである。オロソカに合わせて、この意味を別グループとして立てたことを意味する。

なお、今回の調査で、又新たに考えが変わり、所属意味グループを変更した例があるので、数値は必ずしも前号に掲げたものと一致していない。

△ 注3 ∇ 詳しいことについては、第十九号参照。

△ 注4 ∇ 『万葉集』に「山鳥の尾ろの初麻（はつを）に鏡懸け唱ふべみこそ汝に奇そりけめ」（山鳥の尾に似た初麻に鏡を懸けて神に呪文を唱える役を私がするはずになつている）「私はあなたの妻になるはず」からこそ、当然の噂が立ったのだからが。「実際には困つてしまふ」（△卷十四・三四六八∇という歌があり、それを踏まえて、「山鳥のをろ」と言つたもの。

△ 注5 ∇ 調査に当たつて、左の詳論は特に参考にさせて戴いた。

河辺 名保子 「おろか」の意味

『学習院大学文学部研究年報』第6輯
昭和三十五年三月